

事務局通信

第28回 日本熱帯生態学会年次大会案内

「タイ北部農山村における

都市への人口移動と

過疎化の概況」

【4ページ】市川さんらの

記事を掲載しました。



大会会長: 水永 博己
大会実行委員: 新江 利彦, 檜本 正明, 牧田 史子
日時: 2018年 6月8日(金) 編集委員会, 評議会
 6月9日(土) 一般発表セッション, 総会,
 吉良賞授賞式・講演, 懇親会
 6月10日(日) 一般発表セッション, 公開シンポジウム
会場: 委員会 静岡大学農学総合棟 (静岡市駿河区大谷 836)
 大会 静岡大学農学総合棟
 懇親会 静岡大学農学総合棟二階, 大学生協第三食堂
 公開シンポジウム 静岡大学農学総合棟(大講義室)
大会ウェブサイト: <https://www.shizuoka.ac.jp/jaste28/>
 地図, 交通, 最新情報, 英語での情報は, 上記ウェブサイトをご
 参照ください。大会当日まで随時更新していきます。
大会事務局: 〒422-8529 静岡市駿河区大谷 836
 静岡大学 農学部 造林学研究室内
 第28回日本熱帯生態学会静岡大会実行委員会
 電子メール: <jaste28_suruga@yahoo.co.jp>
 電話 :054-238-4841(水永)

公開シンポジウム:「熱帯地域のチャ栽培と環境・文化との多様な関係」

日時:2018年6月10日(日) 13:00~16:00(予定)

会場:静岡大学農学総合棟(大講義室)

東南アジア熱帯の山岳地では、チャは重要な産業植物であり、それぞれの地域で独自のチャの栽培形態やチャ葉の利用形態が発達してきました。チャ栽培は山岳地の複雑な地形を利用した経済活動であるだけでなく、チャ園は山岳域の環境や住民社会そして文化に深く関わっている植生です。このようなチャ園の生態系サービス(供給, 文化, 調整, 基盤)を把握しておくことは、熱帯山岳地におけるヒトと環境のかかわりを理解するうえで重要な視点であると考えます。

このシンポジウムでは、熱帯地域におけるチャについて、伝統的な文化民族的視点、現代社会の中で変容する社会との関係、地域による栽培技術の多様性、植生の山岳環境に及ぼすインパクト等の講演を行います。日本の茶どころ静岡の地で、熱帯地域の山岳地のヒトと環境の関わり合いをチャという植物を通して考える時間としたいと思います。

掲載記事

- 1 JASTE28 大会案内
- 4 タイ北部農山村における
都市への人口移動と
過疎化の概況
市川昌広・佐々木綾子

学会間連携:

第28回日本熱帯生態学会年次大会では、異分野の研究者との交流を深めるために、次の7つの学会と連携して大会を実施します。

日本アフリカ学会、日本サンゴ礁学会、日本マングローブ学会、日本タイ学会、
日本熱帯農業学会、日本泥炭地学会、東南アジア学会
(これら連携学会の会員は、当学会の会員と同条件で研究発表できます)

優秀発表賞:

今大会から学会長による優秀発表賞を口頭発表、ポスターの双方で設定します。複数のレフェリーによる厳正な審査を行います。審査基準など詳細は、当ウェブサイトで後日公開します。同制度へエントリーする場合には、大会参加申し込みの際に所定欄にチェックをお願いします。

参加申し込み:

大会ウェブサイト <https://www.shizuoka.ac.jp/jaste28/> から参加申込書をダウンロードし、必要事項を漏らさず記入の上、JASTE28 大会事務局< jaste28_suruga@yahoo.co.jp > に電子メールで送付してください。電子メールでの送付が難しい場合は、実行委員会までご相談ください。なお、発表者は日本熱帯生態学会会員と上記の連携学会会員および「**JASTE 国際交流学生枠****」の対象学生に限ります。これらに該当しない方で、研究発表を希望する場合は、JASTE 会員管理窓口 (jaste@soubun.com) に連絡し、事前に会員登録を行ってください。

研究発表される方は大会参加申し込みを **4月20日(金)17時**までに済ませてください。要旨提出締め切りは **5月7日(月)12時必着**です。

**「JASTE 国際交流学生枠」の要件

- 1: 日本熱帯生態学会会員の所属する大学及び研究機関が国際交流プログラム等で公式に受け入れた海外の大学の学生であること。
- 2: 当該プログラムにおいて日本での滞在期間が6か月未満の学生であること。
- 3: 大会実行委員会が認めた学生であること。大会実行委員会は当該大学あるいは研究機関に属する会員の推薦に基づき判断する。

本枠に学生を推薦される会員の方は、事前に大会事務局までご連絡ください。

講演要旨:

研究発表をされる方は、講演要旨を A4 用紙 1 ページにまとめ、**5月7日(月)12時**までに大会事務局< jaste28_suruga@yahoo.co.jp > あて電子メールで添付ファイルとしてお送りください。

ファイル形式は MS Word (.docx) を用いてください。

講演要旨は、以下の様式で作成願います(そのまま印刷します)。

- 余白: 上下左右とも 25mm.
- タイトル(第1行)と氏名・所属(第2行)は、更に 25mm 下げる(用紙の左端から 50mm).
- 発表者の氏名の右上に○をつける。
- 本文は氏名・所属(第2行)の後に1行あけて印字する。
- 図表は白黒とし、余白からはみ出ないように貼り込む。

参加費:

前納大会参加費: 一般 5,000 円/学生 2,500 円

前納懇親会費: 一般 5,000 円/学生 2,500 円

当日申込み参加費: 一般 6,000 円/学生 3,000 円

当日申込み懇親会費: 一般 6,000 円/学生 3,000 円

(懇親会定員超過の時は懇親会の当日申し込みはありません)

講演要旨集のみ希望: 2,000 円(大会後郵送いたします)

- 前納された費用はお返しできませんが、当日欠席された方には、講演要旨集を1部お送りします。
- 費用前納に係る領収書は、「払込取扱票の受領書」もしくは「銀行等の受領書／領収書」などをもってかえます。

発表参加申し込みと前納送金の締め切り:

発表参加の申し込み、参加費・懇親会費の前納は、すべて**4月20日(金)**とします。

郵便局から郵便為替による送金:

口座番号:12310-58846831

口座名(漢字):第28回日本熱帯生態学会年次大会実行委員会

口座名(カナ):ダイニジュウハチカイネットタイセイタイガツカイネンジタイカイジッコウイインカイ

※郵便局で青色の払込取扱票を使用して下さい。

※払込取扱票の通信欄に、必ず送金内訳(一般／学生の別、参加費／懇親会費の有無／要旨集代の別)を記載して下さい。

銀行からの振込みによる送金:

銀行名:ゆうちょ銀行

店名:二三八店(ニサンハチ店)

口座種類:普通

口座番号:5884683

口座名(カナ):ダイニジュウハチカイネットタイセイタイガツカイネンジタイカイジッコウイインカイ

銀行送金の場合には、必ず振込時にメールで氏名、送金内訳(一般/学生の別、参加費/懇親会費の有無/要旨集代の別)を実行委員会あてに連絡してください。メールあて先は< jaste28_suruga@yahoo.co.jp>, 件名を「送金内訳」としてください。メール送付に困難のある方は実行委員会までご相談ください。

託児施設の利用:

本大会の参加者は静岡大学の保育施設「たけのこ」の利用が可能です。下記ページをご参照いただき、利用者本人が直接、本学の男女共同参画推進室に申し込みください(受け付け開始時期は未定ですので、大会ウェブサイトで確認ください)。なお現段階では、託児所の利用費は個人負担を原則としておりますが、負担支援について現在検討中です。

<http://www.shizuoka.ac.jp/sankaku/>

タイ北部農山村における都市への人口移動と過疎化の概況

市川昌広(高知大学)・佐々木綾子(日本大学)

An overview concerning migration from rural to urban areas and depopulation in villages in Northern Thailand

ICHIKAWA Masahiro (Kochi University) & SASAKI Ayako (Nihon University)

1. はじめに

日本では、農山村から都市への若者の人口移動により過疎・高齢化が進んだ。今日では急速に進む人口の自然減も加わって、その状況はさらに深刻になっている。となりの韓国でも類似した現象がみられ(金 2018)、当現象は日本に限られるものではない。さらに、経済発展が進んだ国々にだけみられる現象ではないようである。執筆者(市川)は、マレーシア・サラワク州の農山村において、住民が都市へ移住することにより空き家が目立つようになり、なかには 7 割が空き家の村があることを報告している(市川 2018, Ichikawa 2011)。

都市への人口移動による農山村の過疎化は、東南アジア各地の農村でみられ始めているのではなかろうか。たとえば、マレーシアと同様に、アセアンのなかで経済成長が進んでいるタイはどうであろうか。このような考えから執筆者(市川)は、2017 年 8 月から 9 月にかけて 1 週間、タイ北部山間地の農山村で調査をおこなった。自動車を借り、運転手を雇って村を巡り、そこでここで停まっては住民に村の状況をざっと聞いて回った。村の長を訪ねたこともあったが、道路沿いに建つ雑貨・飲食店などに立ち寄り、その店主や客などから話を聞くことが多かった。もうひとりの執筆者の佐々木は 2017 年 9 月上旬に 5 日間、チェンマイ県でミアンと呼ばれる後発酵茶を生産している村々を中心に巡り、市川と同様に村の状況や生業の変化について聞き取りをおこなった。

ひとつの村で複数の村人から話を聞いているが、詳細なデータをとるには至っていない。このため、本稿は聞き取った話やみた風景から得た印象論的な報告にはなるが、タイ北部のいくつかの村々でみられた都市への人口移動、およびそれに伴う農山村の人口減少についての様子を書きとめておく。ここで過疎とは、都市への人口移動などにより人口が急速に減少し、村の機能が大きく損なわれたり、存続が危ぶまれるような状態を示す。

タイの全人口は 2017 年時点で約 6,912 万人。タイ系民族(約 85%)、華人(約 10%)、モーン・クメール系、マレー系、ラオス系、インド系が含まれる。タイ北部には山間盆地が数多く形成され、そこではおもにタイ系

民族のなかのタイ人(コンムアン)が灌漑農業をおこなっている。彼らはおもにタイ語を話す。山地では、チベット・ビルマ語族のカレン人、モン人、ヤオ人、ラフ人、リス人、アカ人など、多様な民族が暮らしており、焼畑農業や野菜栽培などを生業としている。彼らをまとめて本稿では山地民と呼んでいる。

2. チェンマイ周辺の村々を巡る

執筆者(市川)が最初に行った村はチェンライ県にある A 村(図 1)であった。片岡樹さん(京都大学)が長年、調査をしてきた村で、竹田普也さん(京都大学)らとともに訪れた。幹線道路から村に至る道は、片岡さんが調査を始めた当時は未舗装だった。雨季には自動車がぬかるみに立ち往生し苦勞したというが、今日ではほとんど舗装されており小一時間で快適に到着する。標高約 1000m。ラフ人、アカ人、華人など複数民族により構成される村である。

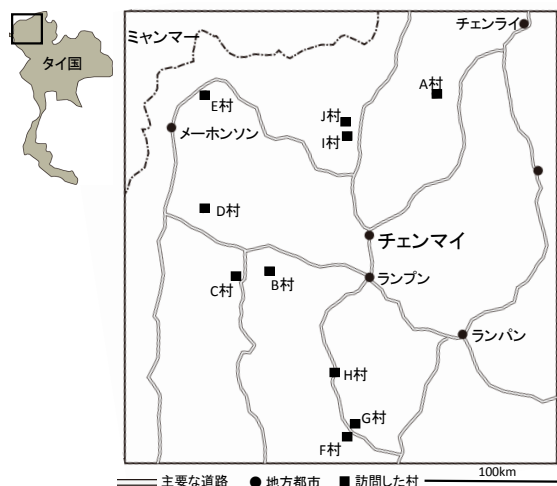


図 1. 調査した村々の位置。

茶の栽培がおもな生業で、茶葉を釜で炒って製品とする。以前から村外に売っていたが、とくにここ 4, 5 年は中国から買い付けに来るので、生産量と収益がともに増えているという。茶を加工する設備を新しく整えているところが目立つ。

村内である程度の収入を得ることが可能であるが、片岡さんによれば、最近、村外へ出る人も増えているという。学童をもつ父母がチェンマイやバンコクなどの都市へ家族で移住する例や、マレーシア、韓国、台

湾などの海外へ出稼ぎにいく例が目立つようになってきた。都市へ移住後も家には祖父母が残っているの
で空き家は目立たないが、若い世代の村人が村外に出
て働くのは普通である。すでに学校を終えた 20～
30 歳代の若者が村に残っていると、家の者から「とな
りの子は外に出てちゃんと稼いでいるのに、なにをぶ
らぶらしているのか」などのような嫌みを言われるよ
うになってきたようだ。



写真 1. A 村での茶栽培農家の加工場。

A 村をあとにして、チェンマイに出る。そこからラオ
スに向かう片岡さんや竹田さんらとは別れて、執筆者
(市川)はタイ北部の村巡りを続けることにする。3 日
間ほどで、おもにチェンマイより西側の山間地を回っ
てみたい。4 輪駆動の自動車を借り、持ち主のソブン
さんに運転をしてもらう。彼はカレン人で、40 歳手
前の男である。チェンマイから西へ3時間ほどのところ
にある村に暮らしている。英語での会話にもほとんど
支障がなく、タイ語がまったくできない執筆者(市川)
には大変に助かる。道中に聞いた彼のこれまでの経
緯が興味深かった。

彼が生まれ育った村では、30 年ほど前まではケシ
の栽培をしており、彼が子供の頃は収穫の手伝いを
したそうである。軍がヘリコプターで来てケシを刈りと
るなどで栽培ができなくなった後は、コーヒー、梅、キ
ャベツなどの商品作物の栽培が奨励された。村で彼
は小学 6 年生までしか学校にいない。16 歳にな
ると仕事を求めチェンマイに出た。最初の 2 年ほど
はガソリンスタンドで働きながら、タイ語を習得するた
めに夜間学校に通ったという。カレン語しかできな
いと良い仕事につけない。読み書きを含めタイ語をお
ぼえと、外国人観光客を相手にするガイドの仕事に移
った。おもにヨーロッパから来る客を山のトレッキング
に連れていった。一日の仕事を終えると、毎日その日
におぼえた英語を辞書を片手に復習した。休みの日

には図書館に行き、図鑑で鳥の名前をおぼえたとい
う。バードウォッチングのガイドが得意分野らしい。今
では村に戻って暮らしており、ガイド仕事の声がかか
ると出ていく。彼の村は 100 世帯ほどで 600 人ほどが
住んでいる。若い人は都会に出ていくが、村に残った
り、戻ったりする人も多く、空き家が増えるとか過疎化
しているということは無いという。

そのソブンさんとともにチェンマイを出発し南西
方向に向かう。道は幹線道路を外れても結構舗装さ
れているが、山のなかでは未舗装部分がまだ多く残
る。雨季なのでところどころで泥にはまり、脱出に手間
どる。周囲の山には乾燥フタバガキ林が広がっている。
小さな峠を越えては小盆地となり、そこにカレン人の
村が現れるという繰り返した。谷間には出穂前の緑の
稲が揺れる棚田が広がり、斜面には焼畑跡が点在し
ている。少し高いところでは、野菜、落花生、トウモロ
コシなどが栽培されている。そんな村のひとつの B 村
(図 1)に至ったあたりで夕暮れ時となり、そこに一泊さ
せていただく。130 世帯ほどで 500 人余りが暮らして
いる。

村長の家にお世話になる。彼は、8 人兄弟の 5 番
目で 46 歳。若いころには、平日はここで農作業をし、
週末にバイクでチェンマイまで出て学校に通ったそう
だ。他の兄弟姉妹もすべて近隣のカレン人の村々に
暮らしているという。子供は 2 人おり、22 歳の長女は
隣村の小学校を出て、その後、チェンマイの学校や
チェンマイの専門学校を卒業し、現在は教師としてミ
ャンマー国境あたりで働いている。12 歳の次女はこの
村で小学 3 年生まで学び、その後はチェンマイに出
てキリスト教の教会の学校で学んでいる。この村でも
教育や就職の機会を求めて外に出る若者は多いが、
村に残ったり戻ってくる者もいて、過疎というほどでは
ないという。



写真 2. 小盆地に広がる B 村。

つぎの日に訪れたC村(図1)は、福島万紀さん(都留文科大学)が調査している村だ。ドイインタン国立公園の近くで、多くのトレッキング客が立ち寄る。国立公園が開設され、道路が整備されてきたここ 20 年ほどで客が来るようになったという。ゲストハウスやレストラン、お土産店が点々とある。美しい棚田風景を見ながら何組かの観光客がレストランでお茶を飲んでいる。コーヒー栽培がここ 20 年ほどで盛んになり、観光客に焙煎・挽きたてのものを提供している。過疎化が進んでいるとか空き家がみられるなどは無いようだ。



写真 3. C 村を歩く観光客。

山岳地帯を下り、広く開けた盆地のメーチェム(Mae Chem)で昼食をとったのち、北上する。道沿いにはトウモロコシ畑が広い。ソンブンさんによると、以前は米や落花生などがつくられていたが、ここ 20 年ほどで CP という大企業との契約栽培の下でトウモロコシ畑が広がったという。そのためだろうか、道沿いのタイ人(コンムアン)の村で話を聞いてみると、チェンマイへの出稼ぎや移住は少しはみられるが、多くはないという。

キャベツを満載にした多くの小型トラックといき違う。道を北西方向に標高を上げながらしばらく進んでいくと、標高 1,400m ほどの高原状のところにモン人の村があり、あたり一面、キャベツやトマトなどが栽培される畑になっている。

そのあたりで幹線道路を右に外れ、悪路を 40 分ほど行ったところにカレン人の D 村(図 1)がある。ここも福島万紀さんが調査している村だ。近隣のモン人のようにトウモロコシや野菜は多くは作らず、おもに焼畑で自給用に陸稲を作っている。小豆がこの商品作物である。モン人のようにキャベツなどの商品作物を作らない理由としては、搬出のための道が悪いこともあるが、それ以上に化学肥料や農薬、除草剤を多用する環境に悪い農業はやりたくないことを強調する。

以前の福島さんの話では、幹線道路から離れ、収入がさほど多くないこの村の人々は、子供に高い教育を受けさせることに熱心だと言っていた。村人に聞いてみると、調査時点で高校に 20 人ほど、大学に 10 人ほどが村外へ出ているという。彼らは奨学金を受けながら勉強している。多くの子供が村外に出ているものの、残っている若者もいるし、過疎化しているという認識はないという。

クンユアム(Khun Yuam)の町に一泊し、翌朝、タイ日友好記念館を足早に見学してからメーホンソンに向けて出発する。自動車から道沿いを眺めている限りでは、メーホンソン周辺は森林が多く、村は少なくみえる。道路とほぼ並行して、西側に 20km ほど離れたところにミャンマー国境がある。メーホンソンから 1 時間ほどの山中にある黒ラフ人の E 村(図 1)に寄る。およそ 100 家族で 500 人ほどの村だという。焼畑で米、トウモロコシ、芋などを作り、現金収入はおもに養豚から得ているという。村内を歩くと、各家の豚を集めて飼っている養豚エリアがある。途中から道案内をしてくれた女性によれば、彼女は 3 頭だけだが、10~20 頭飼っている家もあるという。彼女は最後に私を自宅に招き、土産物(民族刺繍の小物入れ)を出してきて買ってくれという。国道沿いのこの村では、このように観光客からの収入もあるのだろう。土産物を選びながら村人の都市への移住について聞くと、村の若者は村外へそれほど出ていっていないとのことだった。



写真 4. E 村の住民が売るみやげもの。

その日は、メーテン(Mae Taeng)まで至り宿泊する。この 3 日間でチェンマイの西側の山地を駆け足でまわった。印象としては、若者が都市へ出ていっている村は多いが、村に残る者や一度出て戻ってくる者も多く、過疎化が大きく進んでいるとか、空き家が目立つといった状況はみられない。村によってあるいは民族によって違いはあるが、観光、商品作物栽培、家畜

飼育などの現金収入源がみられ、村での生活が成り立っているようだ。タイ北部山間地の農山村で過疎化が進んでいるのではないかという調査開始前の予想はやや外れた格好だ。運転手のソンプンさんも、彼の村を含めてタイ北部の村では全般的に似たような状況だろうという。山地民には彼自身も経験したように、言葉の問題があり、都市に出ることに対する障壁がある。

翌日はメーテンからチェンマイを越えて、ランブン (Lamphun) 県の南へいくことにする。A 村を共に訪ねた竹田さんが言っていたことを思い出したためだ。彼が言うには、今日、山地民の村では野菜栽培や観光などで現金収入があることが多い。一方で、水稻栽培を主生業としてきたタイ人 (コンムアン) が住む村では、コメはさほど儲けにはならない。彼らに言葉の障壁は無いので、都市への移住が進んでいるかもしれない。

地形がやや緩やかになるタイ北部の南側で、今回ほとんど訪ねていないタイ人 (コンムアン) の村を目指した。リ (Li) に至る道 (106 号線) 沿いにはロンガン園が多い。ソンプンさんによるとこのあたりにタイ人 (コンムアン) の村が点在しているという。水田はさほどみられないが道から離れた川沿いにあるのだろう。

リ周辺のひとつの村で銀細工店があったのでそこで自動車を降り、声をかけると予想に反してこのほとんどがカレン人だという (F 村 (図 1))。店主によるとこの一帯で 6,000 家族が住むという。背景はよくわからないが、村の道も格子状に付けられており、計画的に作られた感じだ。どこからかの移住村の雰囲気もあるが、木々は大きく、家も新しくはないので数十年はたっているようにみえる。

この F 村からは、多くの若者がチェンマイやバンコクに出ていくが、5 年~10 年ほどで村に戻って結婚し、定住する人が多いという。過疎の状況にはないようだ。水稻作をおこなっているのは半分ほどの世帯で、残り半分は水田を持っていない。村のなかでも、トウモロコシやロンガンの栽培手伝いや家の建築や道路等の建設など賃金を得られる仕事がたくさんある。だから農地を持っていなくてもけっこう生計をたてられる。店の前の椅子に座っていて、これから建設の仕事に出かけるという男がそう教えてくれた。その店主はチェンマイの銀細工の工場で 6 年ほど働いたあと、帰村しこの店を開いて 6 年になるという。腕がいいのでチェンマイからも買い付けに来るらしい。

F 村からチェンマイ方向に 2, 3km 戻ったところにある道路沿いにタイ人 (コンムアン) が暮らす村があった (G 村 (図 1))。雑貨屋の外に元教師をしていたという初老の女性が腰かけていて、彼女から話を聞いた。こ

こは 200 家族ぐらいからなる村である。ほとんどの若者はチェンマイやランブンに教育や仕事を求めて出ていくという。仕事では、工場や飲食店に雇われる者が多いが、近年は大学を出る者が多いので、もっと良い仕事につく者も増えている。以前は都市で数年~十数年働いたのち村に戻ってきていた。ここ 10 年、20 年ほどで一般的になってきたのは、都市で 50 歳ぐらいまで働いたあと村に戻り、家を建てて余生を過ごすという型である。先ほどのカレン人の村と比べると、カレン人は農業で生計をたてることを指向するのに比べ、タイ人 (コンムアン) は教育レベルがより高く、言葉の問題が無いのでより都市指向であるという。

その後、チェンマイへ帰る途中で立ち寄ったタイ人 (コンムアン) の村 (H 村 (図 1)) でも同様な話がきかれた。やはり若者の多くがチェンマイやランブンに出て働き、50 歳ぐらいで村に戻って余生を暮らすそうだ。学校の勉強が苦手な者が村に残って農業に従事するとのことである。リ周辺のタイ人 (コンムアン) の村では、過疎化が進んでいるとは言えないが、山地民と比べると教育レベルが高く、言葉の問題が無いことから、都市へ出ることへの障壁が低く、そこでの居住期間も長そうである。チェンマイに戻り 1 泊し、つぎの日は佐々木綾子さん (日本大学) と落ち合い、彼女が長年調査してきた村を訪ねることにする。

3. ミアン生産地を巡る

早朝、チェンマイ出発し、ミャンマー国境まで続く国道を一路北へ向かった。目的地は執筆者 (佐々木) が 2002 年から調査をおこなっているチェンダオ郡の村 (I 村 (図 1)) である。途中メーマライ (Mae Malai) の市場で昼食を調達したが、簡単な英語・日本語が飛び交うことに驚いた。このようなことは以前の調査時には無く、ここ数年でトレッキング目当ての外国人観光客が増加した結果のようだ。メーマライからさらに 20 分ほど北上し、西に折れ山道に入る。急カーブが続く道を 30 分ほど上ると I 村の中心集落に着く。



写真 5. 過疎化が進む I 村。

I 村については、以前、本ニューズレターに執筆したことがある(佐々木 2006)。標高約 1,000m に位置し、米や野菜を栽培せず、ミアンと呼ばれる噛み茶(後発酵茶)を生産するタイ人(コンムアン)の村である。「ミアン村」はタイ北部山間地に散在し、森の樹木を残しその中でチャを栽培する土地利用形態が共通している。そのひとつである I 村ではタイ北部の都市の拡大やミアン需要の低迷を背景に、1980 年代後半から村外への移住が相次いだ。1982 年と 2002 年と比較すると世帯数が 60 世帯から 32 世帯へほぼ半減している。2002 年から 2010 年では、世帯数は横ばいだが、おもに若い世代の離村は続いているため人口は 87 人から 71 人へと減少し、住民の高齢化は続いていた(佐々木 2012)。

村で生まれた子供らが離村に至る経緯はどの世帯も似かよっている。村の小学校では 4 年生までしか学べないため、その後は親戚や知人を頼って平野部に住み込みながら小・中学校に通うことになる。かつては高校を卒業すれば高学歴だったが、今では大学や専門学校に通う子供らも増えている。いったん村を離れ平野部の生活に慣れ親しんだ子供たちは、そのまま近隣都市で就職、結婚し、ほとんど村には戻らない。きょうだいが都市で先に居を構え、と、妹弟がそこに居候する形で移住していく話もよく聞かれる。

このような状況では村に帰ってくる若者は歓迎されそうなものだ。しかし、時折見かける彼らは、村人いわく「失業した」、「怠けた」、「刑務所から出てきた」から帰ってきているそうで、あまりいい感想が聞かれない。そのためか彼らも村にあまり長居をしない。一方で、中学卒業後、村に戻り親を手伝ってきた数少ない 30 歳代の住民は、2010 年には村長や助役を担うようになり、王室プロジェクトが導入したコーヒー栽培など、新しい生産物にも積極的に取り組むようになっていた。

前回訪問した 2014 年にはコーヒー栽培に期待を寄せる村人が多かったのも、執筆(佐々木)はミアン村からカフェ村になるかもしれないなど想像を巡らせていた。実際には、コーヒー栽培は定着したもの、十分な出荷量をまだ確保できてはいないようだった。拡大に消極的な理由として、コーヒーは化学肥料を使いすぎるといふ声が聞かれた。本来、ミアン生産のためのチャ栽培には化学肥料や農薬を一切使用していないため、忌避感を覚えるようだ。そのためコーヒー栽培を目当てに若者が帰村することもなく、むしろ人口は 2010 年に比べ 2 割強減少して 54 人になっていた。就学、他業種への就業を目的とした離村に加え、50～60 歳代で亡くなった方が非常に多いことも影響

しているようだった。また、初老に入った親世帯が平野部に住む子供世帯を頼って移住していったケースもあった。若い世代が増えず、2002 年に人口の 3 割を占めていた 40 歳代が、数を減らしつつもそのままの割合で 60 歳代になっていた。そのため、薪の確保や収穫後の加工に手間のかかるミアン生産を続けている世帯は数えるほどになっていた。一部の世帯からは、「ミアンの生産者が少なくなれば価格が上がるから、そうになったら再開する」という声が聞かれるものの、その日を想像するのは執筆者(佐々木)には困難に感じられた。

山を下り、麓の民家の前で繻いものをしていた女性に話を聞くと、偶然にもミアン村からの移住者だった。彼女の出身は、I 村から北側の峠を越えた山中にあるミアン村であった。村の世帯数はかつての 3 分の 2 程度になり、残った世帯は飲料茶向けのチャやコーヒーを栽培しているという。彼女はまだ村に茶畑を残している。しかし、すでに家は取り壊して建具をアンティークショップに売ってしまったため、今はときどき様子を見るため戻るぐらいだそうだ。彼女いわく、「村に小学校があったとき子供は 60 人くらいいたが、今は 10 人いるかどうか。10～20 歳代はほとんどいない」とのことだった。周辺のミアン村 2 つはすでに廃村になり、企業が所有する大面積の茶畑に転換された。そこでは、ミャンマーからの移住者や山地民の人々が賃労働を請け負っているという。

つぎの日、執筆者(佐々木)は、バンコクへ向かう市川さんと別れ、チェンマイ県内のもうひとつのミアン生産地、メーテン郡パデー(Pa Daeng)、パペー(Pa Pae)を訪ねることになる。I 村に向かう国道をメーライで西に折れると、やがてメーホンソン県に至る道に入る。この整備された幹線道路の両側の山中には、ミアン村が多数存在している。地図と住民からの情報をもとに急カーブの続く山道を上り、出会った人々に話を聞くことにした。

どちらの地区でもミアン村の家々にはミアンを漬け込むコンクリート製の樽が置かれ、村内の仲買人の家にはミアンの詰まった竹かごがびっしりと並べられていた。かつての I 村やその周辺の村々でもみられた光景だ。ミアンを集積している仲買人の方々に話を聞くと、ミアンから飲料茶生産や果樹栽培に仕事を変えた世帯は少なくないが、まだまだミアン生産を続けている集落は多いという。しかし、ミアンの生産はこの地域でも確実に衰退傾向にある。50～60 歳代のミアン生産者の方々に話を聞くと、どの集落でも「自分が子供だった頃はもっと人がいたが、今は町の小学校に通うためにみな外へ出て行ってしまふ」、「若者はミアンを



写真 6. パペーのミアン仲買人宅。



写真 7. パペーの製茶工場。

作りたがらない」という。昨日の I 村周辺に比べれば人口減少の進み方やミアン生産の衰退の速度は緩やかだが、メーテンのミアン生産地も徐々に変化しているようだった。

本節の最後に、過疎化の状況が厳しい I 村に次いで、今回の調査で印象に残ったミアン村について述べよう。I 村と山一つ隔てたところにある J 村のことである。2004 年に J 村では、1 世帯を除いた全世帯がミアン生産をおこなっており、中学を卒業した U ターン者が家業を継いでいる家が多かった。当時は道が悪く、雨期にはほぼ村から出られなかった。

しかし、13 年ぶりに訪ねた J 村では、山道が舗装され、雨季でも村外との行き来は確保されていた。村の入り口に位置する集落には立派なツリーハウス型のゲストハウスが建設されていた。建設から運営すべてを取り仕切るのは、かつて私の調査時に家を貸してくれた夫婦とその息子家族だった。タイ人だけでなく日本を含め海外からのエコツアー客が多く訪れているようだ。調理や接客、掃除はすべて村の住民がおこない、元気な高齢者はエコガイドとして活躍していた。

他の集落でもゲストハウスが建築中で、英語に不慣れた親を手伝うためにバンコクやチェンマイから戻ってきた 20 歳代の若者たちにも会うことができた。あちこちに建つ新しい家は、親世帯から独立した子供世帯の家である。村長の話によると、ミアンを作る家もまだあるが、飲料用に加工する茶葉を売る家が増えているという。その家々の子供たちは、村でチャーターしているバスに乗って麓の小学校まで通っている。

ミアンづくりをしてきたミ안의森が、今、新しい資源として観光業を支えている。柔軟な考えをもつ彼らだが、ブドウやイチゴ、コーヒーなどの「化学肥料や農薬をたくさん使う」生産物は、行政が勧めても受け入れていない。あくまでもミアンを作るための森とそれを守るルールが土台にあり、その中に新しい可能性を探っていることがとても興味深い。やや特殊な事例であるかもしれないが、「ミアン村」のひとつの展開の仕方を見た思いだった。



写真 8. J 村のゲストハウス。

4. おわりに

本稿では、タイ北部の山間地の村々における人口移動と過疎化の状況について、短期の調査で見聞きしたことを述べてきた。まとめると、山地民が暮らす村々では、若者を中心に都市への移動がみられるが、村に残る者や都市から戻ってくる者もあり、過疎化が大きく進んでいる村は少ないようだった。王室プロジェクトなど政府からの支援や農産物生産の企業の進出などがあり、村や周辺に何らかの現金収入源があることで生活を維持できる。他方で、言葉の障害もあり都市に出ていきにくい状況もある。

タイ人(コンムアン)の村になると、言葉の障壁がなく、一般に学歴が高めになることもあり、都市への移住がより容易になされている印象を持った。いずれは村に戻るにしても、都市での居住期間も長くなる。し

かし、タイ人(コンムアン)の集落であってもミアン村のように、生計がたてづらく、居住や生産の条件が不利な場所では過疎化が進み、さらには廃村がみられた。ただし、その一方で観光やミアン以外の生産物を利用して活性化している村も稀ではあるがみられる。

タイ北部では、政策や民族性などが関係し、地域の特性を反映した農村から都市への人口移動や過疎化の状況がみられる。本稿は、限られた期間で限られた村々においての現地調査からの印象論的な報告であった。より詳細な状況を今後の調査で明らかにしていきたい。

参考文献

市川昌広 2018. 「マレーシア・サラワク州ミリ省バラム川中・上流域の村々で進む人口減少とその背景」『土地所有権の空洞化』(飯國芳明ら編):印刷

中. 京都:ナカニシヤ出版.

Ichikawa, M. 2011. Factors behind differences in depopulation between rural villages in Sarawak, Malaysia. *Borneo Research Bulletin* 42: 275-288.

金 泰坤 2018. 「韓国における農業・農村の変容」『土地所有権の空洞化』(飯國芳明ら編):印刷
中. 京都:ナカニシヤ出版.

佐々木綾子 2006. タイのミアン(食茶)生産から読み取る二つの側面ー変容する伝統的農業と日本茶文化の起源ー」『日本熱帯生態学会ニューズレター』 63:5-11.

佐々木綾子 2012. 「農の場としての森林ー森林を利用したチャ栽培の構造と多面的機能ー」『地球圏・生命圏の潜在力ー熱帯地域社会の生存基盤ー』(柳澤雅之・河野泰之・甲山治・神崎護編): 147-167. 京都:京都大学学術出版会.

編集後記



葉食性の霊長類の食物資源調査の一環として、2017年11月にボルネオのサバ州キナバタンガン流域を訪問しました。毎朝、宿舎の目の前を流れる川からボートに乗り込み、支流沿いの湿地林内の調査路を歩き、植物を見てまわる贅沢な時間を過ごしました。朝夕に川岸に集まってくる霊長類を観察するリバークルーズに参加した際には、森ではほとんど見られなかったテングザル、カニクイザル、ブタオザルばかりではなく、運良くオランウータンの親子にも出会うことができました。(北村俊平)

写真: 朝日を浴びながらイチジクを食べるオランウータンの親子
(2017年11月22日撮影)。

ニューズレターへの投稿は、編集事務局: 北村 (shumpei@ishikawa-pu.ac.jp)・百村 (hyaku@agr.kyushu-u.ac.jp) へ。

日本熱帯生態学会事務局

〒890-0065
鹿児島県鹿児島市郡元 1-21-24
鹿児島大学農学部育林学研究室 (気付)
Tel & Fax: 099-285-8572
E-mail: jaste.adm@gmail.com

The Japan Society of Tropical Ecology

c/o Laboratory of Silviculture,
Faculty of Agriculture, Kagoshima University
1-21-24 Korimoto, Kagoshima, Kagoshima,
890-0065, JAPAN
Tel & Fax: +81-99-285-8572
E-mail: jaste.adm@gmail.com

日本熱帯生態学会ニューズレター 110号

編集 日本熱帯生態学会編集委員会
NL担当: 北村俊平 (石川県立大学)
百村帝彦 (九州大学)

NL 編集事務局

〒921-8836 石川県野々市市末松 1 丁目 308 番地
石川県立大学 生物資源環境学部
環境科学科 植物生態学分野 (C210)
電話: 076-227-7478, FAX: 076-227-7410 (代表)

発行日 2018年2月25日
印刷 創文印刷工業株式会社 電話 03-3893-3692